

ところで、この歌の主眼は、堰におびただしくひっかかっている紅葉に、とどまる秋を認識したところにある。紅葉が堰にひっかかっていたのは、大井河で属目した実景と見てよからう。ただ、川を流れる紅葉にゆく秋を重ね合わせた歌には、早く、紀貫之の「年ごともみち葉ながす龍田川みなとや秋のとまりなるらむ」〔古今集〕巻五があり、「もみち葉の流れて淀むみなどを暮れゆく秋のとまりとはみる」〔古今六帖〕第一もあつた。いずれも、紅葉の流れつく川口を秋のとどまる場所として捉えた作品である。公任が、これらの二首、特に貫之の歌を学んだであろうことは十分に想像される。一方、『後撰集』巻七には、「もみち葉は散る木のもとにとまりけり過ぎゆく秋やいづちなるらむ」〔読入不知〕という、紅葉はとどまって秋の季節のとどまらない現実を嘆いた歌があり、この一首の発想を少し変えたのが公任の作である。先後は明らかでないが、源道済の「小倉山もみちふりしき大井河なみの心に秋ぞとまれる」〔道済集〕も同想である。そこに従来之歌と異なる新しさが存するといえはえいようが、知的なものに興味が傾き過ぎたためか、情感のとばしい歌となつてしまつてゐる。しかし、十月一日の作である上に、冬まで持ち越した秋を歌つて、秋の部とごく自然に連接しており、冬の部の巻首にふさわしい作品である。

○ 十月のついたちころ紅葉の散るをよめる

大僧正深覚

たむけにもすべき紅葉の錦こそ神無月にはかひなかりけれ

〔大意〕 手向けの幣ともなるはずの紅葉の錦も、神無月には散つてしまふし、神のいない月でもあるので甲斐のないことであつた。

〔鑑賞〕 この歌も、前の公任の歌と同様、ことわりのまさつた一首である。

「神無月にはかひなかりけれ」は、単に、「神がいない月なので……」と解するだけでは不十分である。詞書に「紅葉の散るをよめる」とあるので、当然ながら紅葉は散つて見なければならぬ。美しい紅葉の錦も、十月に入ると散つてしまふゆえに甲斐がないのである。

この深覚の歌を読んで想起されるのは、菅原道真の「このたびはぬさもとりあへず手向山もみちの錦かみのまにまに」〔古今集〕巻九と、素性法師の「たむけにはつづりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ」〔古今集〕巻九とである。素性の歌については、顯昭の『古今集註』に「教長卿云、此歌ハ深覚僧正ノ夢ニ、素性ガ我歌ノ一トゾ申ケルトイヘリ」とあり、深覚が心に深くとどめていた作であつたらしい。もちろん、これら以外にも、紅葉を錦にたとえたり、その関連から手向けの幣を詠んだ歌は数多い。手向けの例に限つても

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ

〔古今集〕巻六・兼寛王

秋の山もみちをぬさと手向くれば住む我さへぞ旅ごちする

〔古今集〕巻六・紀貫之

神なびの山をすぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

の作は、十月下旬に詠まれた落葉の歌であり、時間の推移に基づい

十月のついでたちころ紅葉の散るをよめる

大僧正深寛

秋の山もみちをぬさと手向くれば住む我さへぞ旅ごちする

〔古今集〕卷六・紀貫之

神なびの山をすぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

〔古今集〕卷六・清原深養文

わたつみの神に手向くる山姫のぬきをぞ人は紅葉といひける

〔後撰集〕卷七・読人不知

道しらば尋ねもゆかむもみち葉をぬさに手向けて秋はいぬとも

〔古今六帖第一・作者不明〕

たむくとも手向けの神やうげさらん紅葉の錦おほぬさにして

〔源賢法眼集〕

唐錦やまの木の葉をきりたちてぬきとは風ぞよにも手向くる

〔好忠集〕

などが先行作としてあげられよう。その意味では、きわめてありふれた発想である。ありふれているといえば、結句に「かひなかりけり」を措くのもひとつの類型となっていた。たとえば、『後撰集』で三首、『拾遺集』で五首、『後拾遺集』で他に二首の例がある。さらに、神無月という十月の称から神の非在をいうのも、深寛が最初ではなく、曾禰好忠の歌に「何ごとも行きて祈らむと思ひしにやしるはありて神無月かな」〔好忠集〕があった。ただし、深寛の時代に、神無月を「天の下のもろもろの神、出雲にゆきてこの国に神なきゆゑにかみなし月といふをあやまれり」〔奥義抄〕とする俗説がすでに成立していたかどうかは不明である。

落葉を詠んでいる点は前歌と同じであるが、前歌が十月一日の作であったのに対し、「十月のついでたちころ」とやや漠然としている。この場合、「ついでたちころ」といっても、十月一日前後の意ではあるまい。十月一日を起点とした数日間をいっているのであろう。次

の作は、十月下旬に詠まれた落葉の歌であり、時間の推移に基づいて配列されているのがわかる。

承保三年十月、今上みかりのついでに大井河にみゆきせさせ給ふによませ給へる
御 製

大井河ふるきながれを尋ねきてあらしの山の紅葉をぞ見る

〔大意〕 古い時代に行幸のあった大井河を私も尋ねてきて、風の吹きすさぶ嵐山の紅葉を見ることがた。

〔鑑賞〕 承保三年十月二十四日に白河天皇がおこなった大井河行幸での御製である。詞書に「みかりのついでに」とあるのは、大井河での遊覧が鷹道遥にともなう行事であったためである。『扶桑略記』や『柱史抄』下巻によれば、梅津に行宮が設けられ、大井河には、天皇の御船をはじめ、公卿の船が二艘、さらに殿上人の船、内記外記などの船が浮かべられたという。この行幸の性格については、橋本不美男氏が詳細に論じられている。橋本氏によると、白河天皇は、延喜七年九月に営まれた宇多法皇・醍醐天皇の大井河行幸を強く意識していたようである。第二句の「ふるきながれ」は、具体的には延喜七年の大井河行幸を指し、川の縁で「ながれ」を出してきているのである。

いうまでもなく、「あらしの山」は、地名「嵐山」であると同時に嵐の吹きすさぶ山でもある。したがって、嵐山の紅葉は、嵐によ

つて散り乱れているはずである。そのことは、

朝まだきあらしの山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき

〔拾遺集〕卷三・藤原公任

風はやきあらしの山のみち葉も下にはとまるものところを聞け

〔実方集〕

散りまがふあらしの山の紅葉ゆゑ心つくさぬときのみなきかな

〔小大君集〕

散りまがふあらしの山のみち葉はふもとの里の秋にざりける

〔永承四年内裏歌合・藤原祐家〕

といった作によつても知られる。

いずれにしても、掲出の一首は、いかにも王者の作らしい風格のある詠みぶりである。散りまがう紅葉に対しては、白河天皇の自信に満ちた表情が、何となく思いうかべられるようである。天皇の念頭には、あるいは、在原行平の「さがの山みゆきたえにし芹川の千代のふる道あとありけり」〔後撰集〕卷十五）があつたのかもしれない。しかし、それにもまして関係がありそうなのは、上東門院彰子が後一条天皇の春日行幸の際に詠作した、「みかさ山さして来にけりそのかみの古きみゆきのあとを尋ねて」〔玄々集〕である。この彰子の歌は、『大鏡』卷七や『栄花物語』卷十六にも収められ、よく知られていた一首であつた。白河天皇は、彰子の歌をおそらくは意識していたであらう。

同じ行幸の折に、藤原俊家は、「大井河ふるさきみゆきの流れにてとなせの水も今日ぞすみける」〔新勅撰集〕卷七）と詠んでいる。「古き流れ」をいふところは御製歌と類想であるが、臣下の作らしく、

さて、兼房の歌は、『八代集抄』に「心は明也」と注するとおり平明である。このような平明な表現でより、山里の寂寥を歌い、とらう

下の句には天皇への祝意がこめられている。

桂の山庄にてしぐれのいたうふり侍りければよめる

藤原兼房朝臣

あはれにもたえず音する時雨かなとふべき人もとはぬすみかに

〔大意〕 しみじみと寂しい様子で、音を立てて絶えずふつてく

る時雨であるなあ、尋ねてくれるはずの人も尋ねてこないこの住居に。

〔鑑賞〕 流布本では、結句を「とはぬすみかを」とし、「すみかに」という校異を示しているが、伝為氏筆本・太山寺本・日野本ほかの諸本で「すみかに」となっている。こゝは、「を」よりも「に」の方がいい。

『後撰集』卷八所収の歌に、「神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける」〔読人不知〕とあるごとく、時雨は冬の到来を告げるものであつた。『後拾遺集』には、時雨を主題とする歌が四首ならんでいる。初めの二首が時雨の降っている歌であり、三首目は時雨が降つたりやんだりしている歌である。四首目は、時雨を歌つてはいるが、実際には降っていない。これも、時雨が唐突にふり出し、ふつたりやんだりしながら、結局は降らなくなつてしまふという自然の変化にあわせた配列であらう。

神無月ふかくなりゆく梢よりしぐれてわたるみ山への里

となせの水も今日ぞすみける」〔新勅撰集〕巻七と詠んでいる。「古き流れ」をいったところは御製歌と類想であるが、臣下の作らしく、

さて、兼房の歌は、『八代集抄』に「心は明也」と注するとおり平明である。このような平明な表現により、山里の寂寥を歌いとうろろとするのが、『後拾遺集』の時代の新しい傾向でもあった。時雨は通り雨である。したがって、普通は「たえず音する」ことはない。しかし、兼房が桂の山荘にいた時には、ひと時雨してやんだかと思ふと、またすぐに時雨が降ってくる、といった情況であったのだろう。それが、「しぐれのいたうふり待りければ」であり、普段の時雨とはいささか趣が異なっていたために、いっそう深い感慨を覚えただけである。その気持が初句の「あはれにも」にこもっている。兼房は、感慨が深かったゆえに掲出の一首を詠んだのであろうか。だれか知人に贈られた歌であったとも考えられる。そうであるならば、「とふべき人」は特定の知人を指し、その人の無沙汰をうらんだ作となる。

人の尋ねてこない宿にふる時雨を詠んだ歌には、好忠の「しぐれつつ人めまれるわが宿は木の葉の散るをたれかとぞ思ふ」〔好忠集〕や、伊勢大輔の「とふ人もなき山里のむら時雨ふたよりみより驚かすかな」〔伊勢大輔集〕があった。『橘為仲朝臣集』の「とふ人もなき冬の夜のさよなかに音するものはあられなりけり」は、兼房の歌の影響下に詠まれた作であろう。

○ 山里の時雨をよみ待りける

永胤法師

ふり出し、ふったりやんだりしなから、結尾は降りなくなってしまうという自然の変化にあわせた配列であろう。

神無月ふかくなりゆく梢よりしぐれてわたるみ山への里

〔大意〕 神無月も深まり、色も濃くなって散ってゆく紅葉の梢より時雨がわたる深山への里であることだ。

〔鑑賞〕 第二句の「ふかくなりゆく」は、ここで切れているのではなく、初句からも続き、第三句へもかかっていると解したい。「ふかくなりゆく梢」とは、やや言葉たらずの表現ではあるが、

日をへつつ深くなりゆくもみち葉の色にぞ秋のほどは知らるる

谷水のそこも紅葉の色もみなふかくぞ見ゆる秋の佐保山
〔後拾遺集〕巻五・藤原経衡〔十類集〕

高砂にたちわたりたる霧間より紅葉の色のかき奥山
〔海人手古良集〕

神無月まだいくしほもしぐれぬに紅ふかく野はなりにけり
〔嘉言集〕

色深くなりもてゆけばもみち葉の風吹かねども散りまさりけり
〔道濟集〕

落ちつもる紅葉の色に山かはの浅きも深きながれとぞみる
〔和泉式部集〕

などによれば、紅葉の色がますますと見てよかろう。むしろ一方では、紅葉は散りもしているのである。そして、その紅葉の梢の先の空から時雨が降り出し、雲とともに深山への里を移動していったのである。

初句に「神無月」を措いて一首を構成した歌は、実に多く存する。しかも、時雨か紅葉、もしくはその両者を詠み込むのが常套であった。今、時雨と紅葉を共に詠み込んだ先行作の一部を掲げると、

神無月しぐれにあへるもみぢ葉の吹かば散りなん風のまにまに

〔家持集〕

神無月もみぢふる里あれにけり時雨とみえてたもとぬるれば

〔安法師集〕

神無月しぐるる山はもみぢ葉の色も手向けしるべなりける

〔兼登集〕

といった具合である。永胤の作も、そういう和歌の類型を踏襲しているわけであるが、第二句以下の自然の捉え方は新鮮で、しみじみとした情感を失っていない。やはりこの時代の新しい歌風を示しているといえる。『八代集抄』の「時節の哀所のさまおもひやりて見るべくや」という評も、その点をおさえた上での言であらう。

ちなみに、源国信の「み山べのしぐれてわたる数ごとにかごとがましき玉柏かな」(千載集)巻六と、慈円の「み山木の残りはてたる梢よりなほしぐるるは嵐なりけり」(新勅撰集)巻六とは、永胤の歌をふまえているのであろう。

落葉如し雨といふことをよめる

源 頼実

木の葉ちる宿は聞きわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

〔大意〕 木の葉の散る宿では聞きわけるといふことがない、時雨の降る夜であるのか時雨の降っていない夜であるのかを。
〔鑑賞〕 次の家経の歌とともに西宮における歌会での作である。歌会には他に藤原範永と藤原経衡も参加しており、それぞれの家集に、

西宮にて落葉あめのごとし

夜もすがら紅葉は雨とふりつむにながむる月ぞくもらざりける

〔範永朝臣集〕

落つる葉あめのごとしといふ題

雨かとてぬれじとかづく衣手にかかるは惜しむ紅葉なりけり

〔経衡集〕

と見える。

頼実の歌では、山里に住んでいる人の心が詠まれている。しかもその山里の人は、夜、家のなかについて外の音だけを聞いているのである。家経・経衡の作には、夜か昼かの時間の限定がない。範永は夜の落葉を歌っているもの、明るい月夜であり、頼実と違つて、人は外に出ているか、少なくとも外を眺めている。同一の歌題に基づきながら、それなりの差異があるが、四首ともに平明な表現であるのは変わらない。表現が平明であると、事実あるいは実感に即しているかのよう考えがちである。しかし実際には、必ずしもそうとはいえないようであり、頼実の歌でも、下の句に少し拵え物めいた感じがする。

葉の落ちる音と雨の降る音との類似をいうのは漢詩から来た発想

木の葉ちる宿は聞きわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

源 賴実

た感じがする。

葉の落ちる音と雨の降る音との類似をいうのは漢詩から来た発想

であり、このことはすでに小島憲之氏がいわれている。⁽⁵⁾和歌においては、後藤祥子氏も指摘されたこと⁽⁶⁾、読人不知の「秋の夜に雨と聞えてふりつるは風にみだる紅葉なりけり」(後撰集 卷七)があった。頼実がこれを学んだであろうことは、まず確実である。とはいえず、「落葉如し雨」の歌題ならば、そう歌うのが必然であったというわけではない。「古今集」巻五には、凡河内躬恒の「たちどまり見てをわたらんもみぢ葉は雨とふるとも水はまさらじ」があり、『好忠集』にも「つゆばかり袖だにぬれず神無月もみぢは雨とふりにふれども」があった。これら二首は、次々と盛んに落ちる紅葉の様が雨の降る様に似ているといっているのである。藤原公任の「もみぢ葉は雨とふれども空はれて袖よりほかはぬれずぞありける」(大納言公任集)や、『後拾遺集』巻五所収の、

もみぢ葉の雨とふるなる木の間にあやなく月の影ぞもりくる

(白河天皇)

水もなく見えこそわたれ大井河きしの紅葉は雨とふれども

(藤原定朝)

も、それらに基づいたものであろう。つまり、落葉と雨との間には、聴覚上の類似と視覚上の類似が存在しているのである。大まかにいえば、落葉を聞く方がより寂しげであり、落葉を見る方がより艶であるといえよう。頼実らは、両者のいずれかを選択できたはずであるが、範永以外は、明らかに聴覚上の類似に依拠して作歌している。そのあたりに、山里の寂しい風情を愛好した彼らの指向がうかがえる。

藤原家経朝臣

紅葉ちる音はしぐれの心地して梢のそらはくもらざりけり

〔大意〕 紅葉の散る音は時雨が降るように感じられ、それでいて梢の空は曇らなかつたことだ。

〔鑑賞〕 前歌と同じ歌会での作品である。もともと内容は前歌とやや異なり、現実には時雨は降っておらず、木の葉が散っているだけである。範永の「夜もすがら紅葉は雨とふりつむにながむる月ぞくもらざりける」は、雨と落葉との類似を視覚で捉えているようにも解されるが、家経は、「紅葉ちる音」と明瞭に音の類似をいっている。空の曇らないことをいいたのは、「大空はくもらざりけり神無月しぐれ心地はわれのみぞする」(拾遺集 卷十六、読人不知)の影嚮を受けたせいであろう。

「梢のそら」の意を、『日本国語大辞典』は「梢のあるあたりの空。また梢をとおして見える空」とする。木の葉がかなり散ってしまった結果、隙間から空が見えるのである。この語は、むしろ中世和歌において、

待ちもしき梢の空の冬がれにひとりありあけは都なりけり

(拾玉集 第五、ただし作者は藤原定家)

くらき夜の山松風はさわげども梢のそらに星そのどけき

(玉葉集 卷十六、永福門院)

峯しらむ梢の空に影おちてはなのくも間にありあけの月

〔風雅集〕卷三・前大納言忠長

といった用例が見出せる。家経以前には用例が見あたらず、彼の創意にかかる歌語のようである。

十月ばかりに山里に夜とまりてよめる

能因法師

神無月ねざめにきけば山里のあらしの声は木の葉なりけり

〔大意〕 十月の夜、目覚めた折に聞くと、山里に吹く嵐の音は木の葉の落ちる音であったよ。

〔鑑賞〕 嵐を主題とした一首である。

歌には「木の葉」とあるだけで、落葉である旨を明瞭にはいっていないが、神無月の木の葉であるから、落葉ととらねばならない。その上で、「あらしの声は木の葉なりけり」についてふたつの解釈が可能であろう。ひとつは、「ひねもすに見れどもあかずもみち葉はいかなる山のあらしなるらん」〔拾遺集〕卷四・詠人不知)のように嵐が木の葉を運んできて、その葉が家にあたる音を聞いていると解することである。もうひとつは、実際には嵐は吹いておらず、木のおびただしく落ちる音を聞いていると嵐のように感じられると解することである。このふたつの解のうちでは、後者の方がいいかもしれない。

あらしの声は、もの寂しく悲しい気分をさそうものであった。それは、僧正遍照の「秋山のあらしのこゑをきく時は木の葉ならねどもぞかなしき」〔拾遺集〕卷四)によっても理解できる。能因は、この遍照の歌をふまえているのであろう。

「山里は冬ぞさびしきまきりけるひとめも草もかれぬと思へば」〔古今集〕卷六・源宗子)とあるごとく、冬の山里は実に寂しい。しかし、その寂しさを風情として積極的に評価する人々がいた。範永・頼実といった和歌六人党の面々もそうであったが、能因もまたそのひとりであった。『拾遺集』卷四の冬の部に、

夜を寒みねざめて聞けば鶯鶯のうらやましくもみなるかな

〔詠人不知〕

夜を寒みねざめて聞けばをしぞ鳴く払ひもあへず霜やおくらん

〔詠人不知〕

という鶯鶯を題材にした二首が入集していて、夜の寢覚めに何かを聞く点は能因の歌と共通する。ただ『拾遺集』の二首では、冬の夜の耐えがたい寒さのなかで鶯鶯の鳴き声を聞きつつ、一方では、寒さを感じないらしい鳥をうらやみ、他方では、さぞかし鳥も寒いであろうと共感している。能因の歌では、聞いている対象は木の葉の音であり、しかもそれに耐えがたい自己の心を託しているわけではない。能因は、冬の山里の寂しさにひたたりきっているのである。

この歌は『能因法師集』に見え、『能因法師集』はほぼ詠作年順に配列されているので、寛弘七、八年頃の作と推定できる。

おいて、義通の作が後と見ていいように思う。とすれば、義通の新

